

▼フレンズコーナー

橋守活動を通じた市民協働と人づくり
～ ●●だけじゃないCATS-B ～

徳山工業高等専門学校 土木建築工学科 教授
国立高専機構 研究推進・産学連携本部（併任）
しゅうニャン橋守隊 副隊長
海田 辰将



1. しゅうニャン橋守隊とは？

しゅうニャン橋守隊（以下、CATS-B：Civilian Activity Team in Shunan for Bridges）は、山口県の周南地域を拠点に活動する民間企業の土木技術者（産）、自治体職員（官）、徳山高専の教員（学）からなるメンバー6人が中心的役割を果たす任意団体です。結成当初から、「猫のように素早く・強制感なく気ままに」を合言葉とし、インフラの現状やメンテナンスの重要性を広報しながら、日常生活の延長上で「いつでも・誰でも・簡単に・楽しみながら」実施できるメンテナンスの機会を提供しています。

2015年8月4日（橋の日）に実施した第1回目の活動以降、2021年11月末現在までに25回の橋守活動を実施しており、土木に全く縁のない一般市民を含む延べ717名の隊員（参加者）と一緒に延べ49橋の橋守活動（清掃・簡易点検）を実施してきました。本活動は、地域の子どもたちをメインターゲットに据えていますが、隊員の年齢層は1歳から69歳までと非常に幅広く、家族連れやリピーターも多いことが特徴です。



写真-1 第1回目の橋守活動

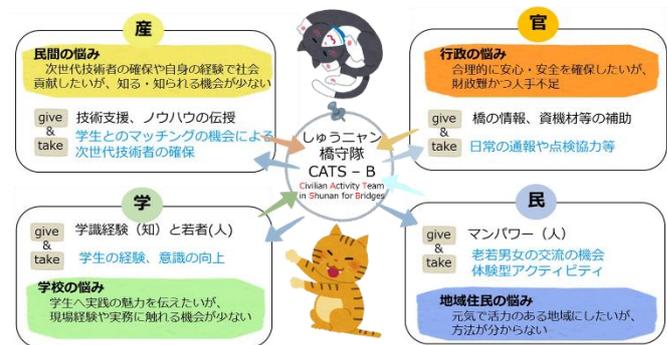


図-1 活動コンセプト

2. 活動コンセプト

CATS-Bの最大の特徴は、産官学民それぞれの立場の方々がオープンな関係にあることで、強制感なく各々の立場でのメリットを感じ、一般市民の目線で活動を企画・運営しています。私もCATS-Bのコアメンバー（副隊長：学担当）であり、学生たちと一緒に運営や活動に参加していますが、試験期間中など忙しいときには「ごめん、無理だわ」と気兼ね無しに言える、有志が好きに時に好んで集まるような、そんな緩いサークルみたいな感じです。

図-1は本活動の基本コンセプトになります。設立当初から、「産官学民それぞれの立場で感じるメリットやGive & Takeを明確にし、それらを繋ぐ存在としてのCATS-Bであること」を理念としています。高専（学）が活動に参加するメリットは、「学生と地域を繋ぐフィールドが欲しい」「学校で学んだこ



写真-2 第1回インフラメンテナンス大賞

とを実践することで、喜んでくれる人がいることを学生に経験してほしい」「地元企業や自治体職員の方々と橋守しながら”おしゃべり”することで建設技術者として地元で働く魅力を伝えたい」といったところでしょうか。その代わりに、子供好きな若い学生たちによるマンパワー・活力、そして学識経験（知）を提供しています。このような Give & Take があることを産官学民それぞれの立場で考え、それに基づいた数々の仕掛けを考えています。たった6人のコアメンバーなので、「次はこんなどう?」「いいね!」といったフットワークの軽さが武器であり、強みであるように感じています。



写真-3 まるで宝探し?排水桧を探せ!

3. まさかの国土交通大臣賞

ところで、CATS-Bは2015年8月の結成からわずか2年足らずで第1回インフラメンテナンス大賞(国土交通大臣賞)を受賞しています(写真-2)。最先端の技術を有する大企業や著名な大学の先生方がずらりと並ぶ霞が関での授賞式で、アラフォーの田舎のおじさんたち+20代女子学生からなるCATS-Bは明らかに異色を放っており、ビビりまくりながら参加したのは良き思い出です。

一方で、当時の受賞理由には、以下のように記載されています(原文ママ)。

気軽でメリットのある活動としての動機付けによ

って自治体・建設業・学校・住民等が隊員となり、清掃や簡易な橋梁点検等の橋守活動を行う取組について、隊員が増加し続けている点等の高い継続性・発展性や、施設を地域の中の資産としての認識の醸成にも貢献する点、人材や予算面で課題のある市町村等への展開が期待できる高い先導性が評価された。

実は、CATS-Bが展開する橋守活動(インフラメンテナンス)には、土木に縁もゆかりもない方々(一般市民)が手弁当でも参加したくなる、地域のニーズをとらえた周到な『仕掛け』が含まれているのです。

4. CATS-Bが繰り出す「仕掛け」の数々による共感→継続のループ

■ 動くのは「子ども」だけじゃない、やってるのは「橋守」だけじゃない

『CATS-Bでは、一般市民の皆様が家庭の貴重な休日の時間を割いて頂き橋の清掃や簡易点検という技術的行為を行っていただきます。親子で橋の掃除をしてください。』と言っても誰もやらないでしょうね。ところが、「休日に親子で”橋守体験”してみませんか?」という風に言い方を変えてみるとどうでしょう? 言っていることは同じなのですが、何か惹かれますよね。橋守活動では、子どもたちが大活躍します。写真-3のように、リピーターの子になると、初参加のおともだちや高専生と一緒に我先にと土砂に埋もれた排水桧を探して通水できるようにしてくれます。その結果、大人たちも頑張り、橋は瞬く間にキレイになります(写真-4)。つまり、子どもが動けば親が動き、きょうだい、じいちゃんばあちゃんまでも動く。そして楽しく充実した活動経験が次回に繋がり、口コミで拡散していく・・・という構図があります。

CATS-Bでは、子どもたちに「楽しい!」と思ってもらえるような、インフラを舞台としたイベントを橋守活動と併せて数多く催しています(写真-4~7)。工作教室、親子ウォーキング、補修体験、ダムカレー作り、現場見学シリーズ、紙芝居、歩測大会、橋梁点検車の乗車体験 etc. これらの経験がやがて



Before After
写真-4 橋守活動の前後

「土木＝楽しい！」となり、土木技術者をめざすきっかけとなります。実際に、徳山高専土木建築工学科の入試面接の場で、幼少期の楽しかった体験や経験を志望動機として挙げる中学生は非常に多いのです。最近では、CATS-Bの橋守活動に参加した子どもたちが本校に入学してくれる例も出始めました。中学校時代の部活のLINEグループで橋守活動のことを知ったという子もいます。



写真-5 長大橋ウォーキング

■ 「大切なもの」だけじゃない

橋などのインフラは人々の生活に欠かせません。しかし、「橋は大切なものだから・・・」だけで土木に縁もゆかりもない人を動かすことは難しいでしょう。先に述べたように、CATS-Bではまず最初に「橋＝楽しいもの」といった意識を抱いてもらい、次に橋守活動の意味を理解することで、橋というインフラ（みんなの資産）を大切にするというマインド（愛着）を醸成します。

つまり、ある程度の専門知識を付けてから実践（フィールド）へ、という教育セオリーを市民協働や市民連携に持ち込むと、市民協働のハードルがかなり上がってしまうように思います。橋守活動というインフラメンテナンス（技術的行為）に参加する理由は何でも良いのです。本校の学生たちも橋守活動に多く参加していますが、初めて参加したときの理由は人それぞれであり、「履歴書のボランティア経験欄に書くネタが欲しかった」「たまたま近所だった」「子どもと遊ぶのが好きだから」といった、必ずしも崇高な使命感や高い専門意識から参加しているわけではないのです。しかし、一定数のリピーターが定着しており、その多くが橋の研究室（海田研）を希望してくれることから、橋守活動が少なからず、学生の将来に影響していることは想像に難くないでしょう。

ちなみに、本紙VOL.88▼オピニオンでも取り上げて頂きました第1回インフラテクコンで最優秀賞を頂いた「わくわくピーナッツ」のメンバーも、以前から橋守活動に参加しており、彼らの

提案内容（スマホゲームで市民協働&橋メンテ）は、CATS-Bの考え方が色濃く出ています。今はまだCATS-B（for Bridge）ですが、このような活動や考え方が橋以外にも浸透してくれれば、最終的に私たちが目指すところ、すなわちCATS-I（キャッツアイ：Infrastructure）・・・なんちゃって。



写真-6 補修体験シリーズ（舗装編）



写真-7 子どもに石橋を教える子ども隊員

● しゅうニャン橋守隊（CATS-B）

私たち「しゅうニャン橋守隊」は山口県周南市を拠点に産・官・学・民の有志が集まり、橋を主なフィールドとして、「楽しみながら」土木インフラの大切さを共有するための活動を行っている団体です。

こちらのHPで活動履歴や告知をご覧いただけます。

<https://catsbproject.wixsite.com/hashimoritai>

